

博物館都市巡り

グラナダ

高橋 哲雄

博物館に住む

博物館に住むとはどういうことか。どんな気分のものだろうか。そもそもそんなことが可能なのか。

もちろん博物館の管理人やガードマン、住み込みの学芸員などは別の話だ。本来住むことが許されない人にとっての話である。

E・L・カニグズバークの『クローディアの秘密』(一九六七)は、いちどはそういう「禁じられた遊び」を試みたいという少年少女の潜在的願望を、家出先として選んだニューヨークのメトロポリタン美術館を舞台に描いてみせた児童文学の名作である。

主人公のクローディアは中流階級育ちの十一歳。しっかりものの、しかし想像力ゆたかな少女で、ちょっととした親への不満と退屈から弟

を連れての家出をする。家出先は平凡な場所であってはならない。大都市の街なかで、大きく気持よく、美しい屋内(野宿なんてとんでもない)にあり、誰もが知っていて出入りも多く、それでいてそこに誰かが隠れていようなどとは思ってもかけぬ秘密の場所であればならない。ポールの「盗まれた手紙」の隠し場所のような空間を見つけねばならないのである。マンハッタンにある西半球随一の巨大美術館はそれにつつつけの場所だった。

姉弟は美術館に首尾よく入り込み、何とイギリス・ルネッサンスの間[※]でエリザベス一世の寵臣ロバート・ダドリの、殺された最初の妻工イミーのいわくつきのベッドで夜をすごし、館内の泉水で身体を洗い、食事は外の安い店でまかせてすこす。

ここまでは、計画的ではあっても無邪気な家出物語なのだが、やが

て話は一転して謎解き小説の趣を帯びる。姉弟は、美術館が新しく入手したミケランジェロの作かもしれぬ天使の彫刻像に興味をもってその真偽を調べるうちに（弟はその指紋を調べたらしい、と言い出す）、それが彼の真作であることを証明するはずの、ある手がかりを「発見」し、小躍りして館当局に遠回しに知らせる。

しかし、それはとくに当局が承知していることがわかり、発見を手土産に英雄として帰還するつもりだったクロードディアは落ち込む。知識では大人たちに勝てないことを覚った彼女は、しかしあきらめず、こんどは天使像の入手先を訪ね、そこで旧所蔵主の老婦人から天使像にまつわる真相を自分たちの「秘密」と引き換えに知らされると同時に、秘密というものが人生でどれだけ大切かを学ぶことにもなる。

たった一週間の家出で姉弟がそれぞれにどれだけ生まれ変わったか生きいきと描かれている点で、これは冒険小説であるとともにすぐれた教養小説なのだが、成功の大きな部分は大美術館という謎がいつばい詰め込まれた空間を話の舞台にえらんだアイデアにあった。天使像に限らず、三百万点に及ぶ収蔵品の多くがそれぞれに秘密を抱え込んでいる。この物語のもう一人の主人公は、実は美術館そのものであった。

アルハンブラまで

博物館は文化財の容器であるが、なかには容器自体が文化財であるところもある。大きな修道院や聖堂、宮殿や城館など、計りしれぬ文

化的価値をもつ建造物で、もともと人が住む建物でなかったり、かつて人が住んでいたが、いまは無住のところは少なくない。

『クロードディアの秘密』はもちろんフィクションだけれど、人が住むのを想定していない文化的財宝のなかに実際に住んだ人もないわけではない。グラナダのアルハンブラ宮殿に住み込んだアメリカの作家ワシントン・アーヴィングは、その稀な幸運にめぐまれた一人だ。

アーヴィング（一七八三—一八五九）は十九世紀前半に活躍したアメリカ文学の第一世代に属する作家で、今でこそ知る人も少ないが、当時は『スケッチ・ブック』（一八一九）の成功によって大西洋の両側で文名を確立し、日本でも明治以来昭和初期まで彼の文章は、「文学的英語」の手本とされ、教科書や副読本に多く採用された。一九三一年生れの私あたりが彼の文章を知る、多分最後の世代だろう。その私にしても『スケッチブック』はつまらなかった。大学受験前に巻中の短編「妻」で友人と、未知の語彙数を比べ合った記憶しかない。

しかし、彼の作品でも『アルハンブラ物語』（一八三二）の印象は別で、そこに描き出されたアルハンブラ体験は少年の胸をあこがれで灼いた。海外に出ることがあるうなど思いも寄らなかった戦後のことだった。

アーヴィングがはじめてアルハンブラ宮殿を訪れたのは一八二九年五月初めのことである。

宮殿の入口をくぐった彼は「まるで、魔法にかけられたような気持

だった。ノあたかも、われわれは全くちがう時代の、ちがう国へさそい込まれたのではないかと、自分を疑った」と、のちに『アルハンブラ物語』で述べている。

興奮さめやらぬままに翌日、グラナダ総督を表敬訪問したアーヴィングは熱に浮かされたように王宮のすばらしさを語り、総督は宮殿の敷地内にある、自分の使っていない公邸の提供を申し出た。アーヴィングは当時マドリッド駐在のアメリカ公使館の書記官であって、親友であるロシア公使館付の貴族と連れ立って長い休暇をとり、スペインを南下していたのである。アルハンブラに住み込むことができたのは、外交官特権のおかげといってもよい。

しかし、そのおかげだけだろうか。アーヴィングはその五年前から家庭教師についてスペイン語とスペイン史を学びはじめていた。彼は『スケッチ・ブック』の序文に当たる「自己を語る」で、「私はいつも好んで知らぬ土地を訪ね、珍しい人物や風俗を観察するのだった」といい、アメリカの自然はすばらしいが、どの風景のなかにも伝説や詩歌、歴史を感じさせるヨーロッパにまず興味を感じずにはいられない、と述べている。父母がスコットランドと南イングランドの出身であり、兄のビジネスの拠点がりヴァプールにあり、彼自身スコットやバイロンに傾倒していたところからはじめはイギリスへの親しみがつよく、『スケッチ・ブック』の題材もイギリスに多くを求めていた。それが一八二四年頃から、ひとつはモチーフの行き詰まり、ひとつには「知らぬ土地」へのあこがれから、新しい題材を求めてスペインへの関心を

深めるようになってきたのである。

やがてマドリッド駐在のアメリカ公使館員から、コロンブス関係の史料の翻訳を頼まれたのが機縁で、彼は一八二六年初めから三年半にわたって公使館付書記官としてスペインに赴く。この間に、グラナダ征服を含むスペイン史にかんする三冊の名著を書き上げた。

つまり、アーヴィングはアルハンブラに辿り着くまでに十分に準備もし、知見を蓄積していたのである。それはわがクローディアがメトロポリタン美術館に住みつくまで周到に館員の行動パターンや館の構造を調べておいたのと同じであった。総督が公邸を提供したのも、外交官という身分に対してだけでなく、彼のスペインについての通りいっぺんでない学殖に打たれたからではなかつたらうか。

もともと当時の外交官は今日のような専門職ではない。時の政府と政治的立場が一致し有力者との縁故があつて、そのうえに国際的な社交人（多くは貴族）であつたり、名のある文学者であればよかった。少しあとのホーソンはずつと冷飯を食っていたが、友人のピアスが大統領になるとすぐりヴァプール領事にしてもらえた。これはアメリカに限ったことではなく、フランスでもアーヴィングと同年生まれのスタンダールは、ナポレオン派であつたため彼の没落後逼塞をよぎなくされていたが、一八三〇年の七月革命でたちまち中部イタリアのチヴィタヴェツキアの領事職にありついた。当時のスタンダールは作家として実績があつたとはいえない。一八三〇年の『赤と黒』の献辞は「。the Happy Few」であり、実際一年で三冊しか売れなかつた。ただイタ

リアへの愛はなみはずれたもので、その執念が実ったのだらう。アーヴィングは、現在の評価とはうらはらにすでに高い文名をかちえていた。それがアルハンブラへのあこがれとともに、ものを言ったものと思われる。

宮殿に棲む

しかし、アーヴィングは公邸住まいには満足できなかった。それはアルハンブラの城郭内にはあるが、ムーア人の宮殿のなかにあるわけではない。現在でも城郭内にはフランシスコ会の修道院を改装した国営ホテルや名に似合わぬ古風なたたずまいの小さな「アメリカ・ホテル」があるが、言ってみればそうしたところに泊まっているのに似ているわけだ。アーヴィングはどうしても無住の宮殿内に住み込みたいと願う。

彼が目をつけたのは宮殿のいちばん奥まったところにある、崖の上突き出して他の部分とは庭や廊下、吹きさらしの渡り廊下でつながる孤立した回廊状の続き部屋である。十六世紀初めにカルロス五世と王妃、侍女の住まいとして増築された部分で、アーヴィングの当時は幽霊が出るという噂が立っていて鍵がかけられていた。

管理人一家はアーヴィングの望みを聞いて、おどろき呆れ、かつ心配した。荒れてコウモリやフクロウの巣となっているうえに、金持ちの外国人が住んでいると知られれば、野盗の類が崩れた城壁を越えて襲ってくるかもしれない。物騒で住めたものではないというのである。

しかし、彼の決心は固く、総督の了解を得て、ついにここを棲家とする。最初の夜の怪しげな物音のスリル、目を追って中天高くに昇る月の描写は印象的である。慣れるにしたがって、その日の気分に応じて獅子の中庭や天人花の中庭といった、天国的なたたずまいの場所をひとり占めして食事をとるようになるが、そのぜいたくさは何といえはよいのだらう。けれども、そのおかげで今日われわれは『アルハンブラ物語』という稀有の記録を読むことができるのである。

アルハンブラ讃歌

さて、そのアルハンブラ宮殿とはどういうところなのか。

おそらく多くの言葉を費やす必要はないだらう。スペインについては民間大使のような存在で、グラナダにも一九七七年から七八年にかけて十か月ばかり滞在した堀田善衛はこう言う。「ことアルハンブラに関するかぎりは私はおめず臆せず、まったく臆面もなくあこがれのアルハンブラと言う。少年のころに、数枚の写真を見、かつワシントン・アーヴィングの『Tales of the Alhambra』(正しくは『The Alhambra』高橋)を読み、またレコードでギターの巨匠セゴビアの弾く『アルハンブラ』というトレモロの技巧を極度に駆使した甘美な音楽を聴いて以来、アルハンブラはあこがれの的だったのである」と

(『美しきもの見し人は』新潮社)。

もうひとり、これは本職の外交官で戦前に二回、戦後に三回、それぞれ一か月ほどをスペインで過ごした津田正夫は、好著『私のスペイン

ン案内』（主婦の友社）で次のように言う。

私は馬場久吉氏の訳した『アルハンブラ物語』を読んで以来、生きていく間にどうにかしてグラナダを訪ねたいという念願を持っていた。戦前、戦後を通してインドではタージマハールを、カイロでは沢山の回教寺院をみたが、陵墓や寺院と違うサラセンの宮殿建築をみることは私の最も強い憧憬であった。……初めて訪れたときは私達はいきなりアルハンブラ宮を訪れることをせず、はやる心を押さえ、右手に樹間からみえる赤い城壁をわざとみないようにして、案内書に従って森の中の径を下りてひとまず丘の麓の「新広場」に下り、そこから改めてゴメレス通りを上った。一つには永い間心に描いていた恋人にいきなり会う気恥ずかしさからでもあつたらう。

アルハンブラはこれら千軍万馬の旅の賢者たちからかくも初々しい讃仰さんごうを捧げられる聖なる地なのであった。この宮殿のどこにそれだけの魅力が潜んでいるのだろうか。

魅力の秘密 住みやすさ

そもそもはグラナダの歴史的・地理的な位置ということがある。スペインはヨーロッパの西の辺境にあるが、同時にかつてのアラブ・イスラム文明の、これまた極西の地であった。「ピレネーから南はヨーロ



ヘネラリーフェ離宮からみたアルハンブラ宮殿
手前の塔の右奥にアーヴィングは住んだ

ツパではない」といわれるが、イスラムの支配は八世紀初めから十五世紀末まで八〇〇年に及び、その最後の皆がグラナダだった。レコンキスタ（キリスト教徒の国土回復戦争）の引き潮に洗われて残った最後のイスラム文明のモニュメントがアルハンブラ宮殿であった。

アルハンブラは立地条件にもめぐまれた。灼熱のアンダルシアにありながら、グラナダは地中海との間に屏風のように立つ三〇〇〇メートル級のシエラ・ネヴァダ（雪の山脈）の意）山脈から流れ出るダール川のつくる高爽の地に広がっている。街の東の緑深い丘の上に赤い石の城郭がめぐらされ、そのなかにアラビアン・ナイトの魔法の国のようにイスラム建築の精華が隠れているのである。城のもっとも美しい眺望はその北側に向かい合って立つアルバイシンの丘から得られるだろう。堀田善衛はこの頂上の、友人の所有する高級アパートでグラナダの日々の大部分をすごした。

アルハンブラがわれわれを魅了するのは、なによりもその見事な水のアートである。シエラ・ネヴァダから導水管で引いた水が中庭の噴水や浴室、室内の水路、庭の池と、いたるところで生かされていて、さすが砂漠の民のわざと感嘆するほかない。ことにすばらしいのは谷をへだてて一段高いヘネラリーフェの離宮で、これは自然を生かした水の楽園である。糸杉と花の下をくぐりぬける水路の噴水の列と水の階段沿いのそぞろ歩きは天国的な至福のときを約束してくれる。

宮殿の内部空間の異次元的感觉については、もう言いつくされている。壁面、天井、柱廊を埋め尽くした装飾の贅と洗練を極めたあでやかさは、それを見たあとでは、同じく豪華にして壮麗な西ヨーロッパ王宮建築の代表格であるヴェルサイユやシェーンブルン宮などでさえ、田舎大尽の成金趣味に映りかねない、ある隔絶した高さに到達している。

と、ここまででは誰しもがうなずくところだろう。私は、しかし、アルハンブラ関係の本を読み漁っているうちに、ひとつ意外な性格付けを堀田善衛が与えていることに気づいた。彼はこの王宮の空間を、ヴェルサイユやマドリッドの宮殿のそれと比べて、「居住性」と「温雅な生活感」のある空間だといっているのである。

彼は言う。「ヴェルサイユ宮殿の、あのドアーというもののまるでない、従っていわゆるプライバシーをまったく欠いている部屋をめぐって歩いていると、私などは、しまいには莫迦莫迦しくなって来る」。たしかに十七世紀末までの西欧の城館には廊下というものがなく、往々にして箱を並べただけで単調、大味になりがちだった。それに比べて、ここアルハンブラは、西欧的な統一の意向というものとはまるで異質で……（宮殿内を）回って歩くと、この非集中、非統一というものが、実に異様な、肉体的なまでに甘美な感触を与え来、……はるかむかしにここに生活していた人々の生活が、それがはるかなる自分の生活であったかのように錯覚されて来る」。

これをアーヴィングの行動に引きつけて言い直せば、この宮殿は住んでみたい気を起こさせる格別な魅力をそなえていたということになる。もしこれが、フランスやイギリスの大きいばかりのシャトーやカントリーハウスであれば、それらがいかかにせいたく空間を提供してくれるとしても、これだけ住みたいという気にはなれなかったのではないか。むやみに大きくないこと、一つ一つの構成空間のつくりに変化があり、ある部分から他の部分へのつながりに、音楽の転調に似た

変幻自在さがあること、そこにアーヴィングを惹きつけ、彼自身はおそらく気付かなかったアルハンブラの 秘密 の一つがあった、と思われるのである。

廃墟としてのアルハンブラ

アーヴィングがアルハンブラに惹かれたもう一つの理由は、それが漂わせる亡びの気配ではなかったか。アルハンブラの荒廃は一四九二年の落城とともに始まった。国事犯や債務者用の監獄になったり、ナポレオン戦争時代には捕虜収容所となったりした。略奪も放置もつづき、ときには総督の娘が「二姉妹の間」で絹織作業をやったり、タイルをはがして売ったりした。ナポレオン軍は撤退に当たって八つの塔を爆破して去った。現在残っている部分はかつての三分の一から五分の一にすぎない。

アーヴィングは、鷗外流に言えば、すべてが「普請中」の、廃墟のない国からやってきたロマンチストで、古い歴史をもつ国、それも成熟、退廃を経て、すでに亡び去った国へのあこがれを抱いていた。もしアルハンブラが、野蠻で残忍な、北からのキリスト教勢力に亡ぼされたムーア人の王国 瀾熟した文化をもち、より寛容な人びとの国の、半ば朽ちかけた都でなかったら、はたしてこれだけ打ち込まただろうか。グラナダ王国の最後の王で、城を明け渡し、しっかり者の母后とともに涙を浮べて去ったポアプディルへの並々ならぬ、実像からいささか外れた思い入れは、研究者の間ではよく知られている。

しかし、そうした想いこそが彼の、史実と虚構をないませた、多くの伝説、伝承、バラードや物語の収集へと駆り立てたのである。そして彼の感情移入は同時代人だけでなく、ずっとのちの世代である堀田や津田にも受け継がれたのであった。

『アルハンブラ物語』は『スケッチ・ブック』に劣らず新旧両世界の読書人に広く受け入れられた。たちまち版を重ね、一八五一年の増補改版が出るまでに五〇刷、翻訳も八カ国語で出された。それはスペイン熱、グラナダ・ブームをかきたてた。多くの旅人がこの地に向い、その見聞をもとに旅行記やガイドブック、画集が刊行されて、人気を呼んだのである。

そのなかにはアーヴィングにならってアルハンブラに住み込む者も現れたことは、しかし、ほとんど知られていない。外交官の特権がなくとも、それが可能な空気が生まれていたのである。イギリスの文人リチャード・フォードは妻子を連れて、アーヴィングの住んだ王妃の続きの間よりさらに奥まったパルタルの塔に棲む。間もなくそこに、やはりイギリスの画家ジョン・F・ルイスも合流した。フォードはマレー社から『スペイン旅行者必携』（一八四五）を出し、評判を呼んだ。彼は『アルハンブラ物語』で活躍する管理人一家やガイドの世話になつたらしい。しかし『旅行者必携』はアーヴィングとは対照的に住民たちに対して辛辣で、その貧しさ、汚さ、風儀の悪さ、犯罪の多さを容赦なく描き出し、そのことで地元では不評を買った。フランスの文人テオフィール・ゴーチエも、少し遅れて宮殿内に滞在した。彼はラ

イオンの中庭を囲む部屋を夜毎に転々とマットを持って移り住んだという。溜息の出るような話である。

アンダルシアを訪ねた文人は、アーヴィング以前にも少なくないが、アルハンブラについて触れた文章は意外に少ない。一七九三年のリチャード・トウイスに始まり、サウジー、シャトープリアン、ユゴーと、それぞれ文章を残している。しかし彼らにとってアンダルシアの魅力はアルハンブラよりも闘牛祭りやファンダンゴ、荒涼たる山地に出没する山賊にあった。つまり「カルメンの国」だった。少し後のメリメはそうした流れに立ち、それを拡大してみせた。アルハンブラに代表されるもう一つの顔 亡び去ったモロ文明のけだるい逸楽とあえかな美は、まさにアーヴィングが 発見 したものである。

アーヴィングのモチーフは、なぜか文学者よりも画家たちによってもっともよく受継がれたようである。彼がアルハンブラという魔法の扉を開いたことによって、異国趣味と廃墟への愛と結びついた、かつてのピクチャレスクの美学が新しく蘇った。デイヴィッド・ロバート・エン・ジョーンズとジュールズ・グアリの『アルハンブラ図面集』(一八三四)などが評判をとり、それがまたブームを呼んだ。かつてスペインの都市巡りでアーヴィングに同行したイギリスの画家デイヴィッド・ウィルキーは、このブームを見て一八三二年初めにアーヴィングに対して、君は「絵画の一派の創始者だよ」とからかったものである。

ふるさとの山と川

アーヴィングの影響はヨーロッパだけのことではなかった。彼の故郷アメリカでもピクチャレスク美学による風景画がまさに同じ頃、それも彼が帰国後居を構えたハドソン河上流地方の自然を対象に開花した。「ハドソン・リヴァー派」がそれである。

その開祖といわれるトマス・コールはアーヴィングより十八歳の年少だったが、二十四歳の時(一八二五年)、この河谷の自然を題材に一連の出世作を描き、それが縁でこの地にスタジオを設け、根を下ろしたことから、この派の名が生まれた。彼を受継いだA・B・デュランド、J・F・チャーチもそうだが、彼らはすべてヨーロッパに留学して、クロード・ロランやサルヴァトル・ローザ、ターナー、コンスタブルなどの影響を受けた。

コールが画風を確立したのは『アルハンブラ物語』出版の七年前のことだから、その影響はない。しかし、『スケッチ・ブック』の影響はあきらかだ、特に巻中もっとも人気を集めた「リップ・ヴァン・ウインクル」がこの地を舞台にしていることに刺激された、と私は考えた。『リップ』に出てくるカーツキル連山 アメリカ人、少なくともニューヨーク人の「心の山」ともいふべき名山 の特徴ある山容を私達知るのには、写真よりもむしろコールらの絵画を通じてである。

生成期のアメリカ文化を代表する作家と画家がこういうトポスで交差するのは興味深い。そのどちらもが、廃墟も神話もない国の「歴史のない悲しみ」を背負っていて、精いっぱいヨーロッパを吸収しよう

と努めた。アーヴィングは十七年を、コールも四十七年の短い生涯の四年をヨーロッパで過ごした。コールの絵にはしばしば廃墟が登場し、神話的な寓意画も好んで描いた。しかし、同時に故郷の山河に、ともにアイデンティティの根っこを見出した。年少のコールの方にその志向が一層強く現れているのは、さもあざむきという気がする。

アーヴィングはアルハンブラに棲み込むという体験を通じて、メトロポリタン体験をもったクローディアと同じく、学習し、成長を遂げたのである。答えはもちろん『アルハンブラ物語』の中にある、彼はそこで多くの「秘密」の扉をこじあけた。けれど、ふと思うのであるが、新世界からの旅人であるアーヴィングが、ヨーロッパ人に先駆けてアルハンブラを発見することができたというそのことのうち、私はある寓意めいたものを感じる。「ピレネーの南」スペインは文化も自然も砂漠に似て荒々しい。彼はそれを当時のアメリカに重ね、そのアメリカの中の緑豊かなハドソン河谷に、シエラ・ネヴァダの雪解け水に洗われるアルハンブラを重ね合わせたのではないかと。

今日ハドソン・リヴァー派の作品を一番まとまった形で見る事ができるのは、ほかならぬメトロポリタン美術館である。ハドソン河を見下ろすこの美術館の開館は一八七〇年、同派の重鎮「デュランドとJ・F・ケンセツトは設立メンバーの中心的存在だった。メトのコレクションは百科全書的であることを特徴としているが、イスラム芸術にかけては世界最大を誇ることを付け加えれば、あまりに出来すぎた

お嘸づくりとの疑いを受けるかもしれない。

という訳で、ニューヨークの子供の夢から始まったこのお話は、実際にその夢を遠い国、はるか昔の宮殿で実現させたニューヨーク人のお話へと移り、最後にまた元の夢の舞台へと舞い戻る。もしかしたらクローディアも、毎日千人を超える見学の児童に混じってこれらの作品に見入り、なにかあたらしい秘密は見つからないかと眼を輝かせているかもしれない。

「蛇足」

現在流布している『アルハンブラ物語』の邦訳は二種類あって、江間章子訳の講談社文庫版（一九七六）と平沼孝之訳の岩波文庫版（上・下、一九九七）がそれである。前者は一八三二年の初版を底本としているようだが、明示されていない。後者は一八五一年の改訂版に基づく一九八三年の全集版を底本としているので、倍以上の分量となっている。ここでの引用は江間訳を使ったが、それは訳の優劣ではなく、改訂版だと言葉数が多くなって引用目的には不向きなため、そういうことになった。平沼訳の「解説」は行き届いたもので、勉強になった。

文化財の中に泊る疑似体験を楽しみたい人にとっては、偶然の符合ながらスペイン、ポルトガルは宝の山である。第一級の歴史的建造物 宮殿、司教館、修道院、城郭 が原形を極力残し

つつ施設を近代化した国営ホテルに改装されて、それほど高い料金ではなく泊ることができるからだ。スペインではパラドール、ポルトガルではボウザーダという。アルハンブラの城内でも聖フランシスコ修道院がパラドールになっている。ここはサンチャゴ・デ・コンポステーラのそれと並ぶ人気で、予約は取りにくい。グラナダの街やシェラ・ネヴァダの眺望にかけては、ホテル・アルハンブラ・パレスに劣るが、隠れ家的雰囲気はすばらしく、宿泊はできなくても食事やテラスでの喫茶はお勧めである。

ハドソン・リヴァー派は日本ではほとんど知られていないが、ヨーロッパ風景画の伝統をアメリカに移植したというだけでなく、幻想的なロマンティズムを精密描写と結びつけて独自の世界を創り出している、見こたえがある。日本でも一九八八年の六月から十二月にかけて、メト所蔵の作品四十五点が静岡、岡山、熊本、各県立美術館で巡回展観され、カタログも作られている。静岡県立美術館編『アメリカ風景画の黄金時代／ハドソン・リヴァー派の世界／メトロポリタン美術館名作展』（一九八八）。もつと網羅的で、しかし手頃な画集を」といつ向きには Bert D. Yaeger : *The Hudson River School. American Landscape Artists, 1999* が八〇点の代表的な風景画を紹介している。